

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

「グッド・ラック！」 スウェーデンからのメッセージ

「リスペクト、つまり相手を尊重する気持ちがいいセックスと愛の基本だ」——スウェーデンの作家であり、性教育者の著者による10代の男の子向けの性教育本。「いちばん大切なこと」として、最初に掲げられているのがこのメッセージ。「いいセックスと愛」のために、男の子が知りたい話、知っておいたほうが良いこと、考えてほしい問題が軽やかな口調で語られる。

最初のテーマは、もちろん「パンツの中のこと」。男の子が気にするのは、古今東西、「ほくのチンコってふつう？」ってことらしい。さまざまな包皮の状態がイラストで描かれ、ペニスの裏スジやら、白っぽいブツブツやら、まだらな色素やら、タマの位置やら、とても細かく説明される。チンコの実況中継みたいで、気がつくとき性科学の知識がどどん頭に入ってくる。ペニスの形はみんな違う。励ましでも、個人の体験談でもなく、若者の興味や関心に沿って説明される正しい知識は、きっと抵抗なく伝わるはずだ。

「ソロセックス」なるオナニーについても、いろいろなやり方が紹介されているが、「ムラムラしないときもある」ことや「ポルノが好きではない」男性のデータも示されている。ポルノを観たいと思う衝動に罪悪感をもつ必要はないが、現実世界とフィクションの違いをきちんと理解しておく必要がある。ポルノにハマることへの不安や対処法などは、多くの男の子が求めている情報なのかもしれない。

チンコ、オナニー、マンコ、恋愛…と話は展開し、セックスの話の前にあるのが、タイトルにもある「リスペクト」。相手を尊重することはもちろん、まず、尊重すべきは「自分自身」であると著者は言う。ときに「男性の集団心理」として、分別を失うこともある。男性として生きることは、「弱い人間に見られたくな



RESPECT 男の子が知っておきたいセックスのすべて

インティ・シャベス・ペレス著
みつつん訳、重見大介 医療監修
現代書館
定価 1980 円 (税込)

い」というプレッシャーと無縁ではない。そんなジェンダーによって、仲間の目を気にして暴力的な行動を選択する必要はない。自分自身を尊重してこそ、相手の許容範囲、言い換えれば境界線を知り、大切にすることができるのだ。

本書が男の子の性的関心に応じた性情報にとどまらない、まさに性情報であるのは、こうしたジェンダーの不平等性をつねに問いかける姿勢にある。「男性というのは社会の中で特別な位置にいる」と構造的な性差別を明確にし、他者を制圧しうる「男の子」の立場に自覚的である必要性が述べられている。男性のジェンダーロールは、男性の生きづらさといった問題だけでない。本書は、社会の力関係を悪化させないという役割を「男の子」に期待するものである。それは決して堅苦しいものではなく、身近なエピソードから「マンコへの抑圧」に気づき、男の子自身も「他人から指図されたりなにかを強いられたりすることなく生きる権利がある」とわかること。だれもがリスペクトされる社会をつくるために、他人をコントロールしないこと、相手に耳を傾け、機会をゆずり合うこと、平等に分担することが大事なのだ。

リスペクトについてじっくり考えたあとは、いよいよ「セックスの基本」。セックスといっても、女の子とのセックスだけじゃない。男の子とのセックス、性的なメッセージを送り合うセクスティング、アナルセックスまでいろいろ。もちろん、ここまで読めば、いろんな恋愛やセックスにもリスペクトが求められることがわかるだろう。「キモイ」なんて言うのは抑圧だってこと、カッコ悪いことだって感じられるかな？

原著は2010年に出版されて以降、2021年12月までに16ヶ国語で翻訳刊行されている。若者は、こんな情報を求めている。そして、こんなふうに率直に性を語ってくれるおとなを望んでいるのだろう。

(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)